

低温に関する情報に伴う営農技術対策

平成23年7月19日
北海道農政部

札幌管区气象台が7月19日に発表した気象情報によると、23日頃にかけてオホーツク海に中心を持つ冷たい高気圧に覆われる影響により、日本海北部やオホーツク海側、太平洋側東部では、平均気温が平年より4度から6度低い状態となる見込みである。

地域では、関係機関との連携のもと、生育状況や栽培環境等を的確に把握するとともに、現地研修会や広報活動の強化等により、次の事項に留意し重点的に指導すること。

水稲(稲の生育ステージに応じた水管理を徹底！)

(1) 冷害危険期の水管理

- ・水深測定板を活用し、水深を正しくチェックし、冷害危険期の深水管理を徹底する。
- ・急激な入水は水温を低下させたり、地域内で用水量の不足などが生じるため、計画的に水の取り入れを行う。深水管理期間は掛け流し管理とせず、必ず止め水管理を行う。
- ・水田への入水は、用水と水田水温の差のない時間帯である夜間から早朝にかけて実施する。
- ・冷害危険期の水管理は、前歴期間の水深10cmから幼穂の伸長に合わせ、水深を毎日徐々に上げていき、冷害危険期終了(全茎の8割の葉耳間長が「+5cm」)まで最大18~20cmの深水管理を行う。

(2) 冷害危険期終了後の水管理

- ・土壌還元(ワキ)の激しかった水田では、冷害危険期終了から出穂前の約7日間を利用して中干しを実施する。土壌表面に細かなき裂が入るまで干す。同時に田面に溝切りを行い、その後の水管理が容易になるように努める。

(3) 出穂後の水管理

- ・出穂が始まると、開花受精や子房(玄米)肥大のために十分な土壌水分が必要となるので、直ちに中干しを終えて湛水状態に戻す。

(4) 稲の葯の充実状況の把握

- ・稲の出穂が始まったら、穎花(稲の花)の観察を行い、葯の形態(大きさ等)や花粉の量、充実度を把握する。

(5) 出穂開花後の水管理

- ・間断かんがいを実施し土壌水分を維持する。
- ・落水時期は登熟状況にあわせて実施し、水田の乾きのよいところでは出穂期後25日以降とする。

お問い合わせ先：食の安全推進局技術普及課（電話011-231-4111 内線27-823）